

伊蘇普物語

牧羊譯

其二十四 農夫と蛇

ある冬の日、一匹の蛇が、寒さの爲めに硬くなつて凍えて居ると、農夫が夫を見て、不憫に思つて、自分の胸の中に入れて温めてやつて居ました。蛇は人の温かさで、すぐ元氣付いて來ましたが、夫と同時に自分の悪い性質を出して、いきなり、恩人の胸に食ひ付いて、手烈い傷を負はせました。そこで農夫は絶え〜の息をついて、『私は、こんな悪漢に憐憫をかけたのだから、この罰を受けるのは當り前のことだ』

恩知らずには最大の恩恵も無益なり。

其二十五 人間と獅子と

或時人間と獅子とが、道連れになつて、森の中を

十

旅行して行きましたが、途中で、お互の自慢話が始まりました。一方が、『そりや力だつて、勇氣だつて人間の方が強いに定つて居る』といふと、一方は『なーに獅子の方が強い』といつて、お互に争つて居ります中に、一つの石像の立つてる所へ來ました。其像は 一匹の獅子が一人の人間の足の下に踏まへられて居る所なんです。そこで人は『どーだい、人間様は違つたもんだらう、この通りだ、獸王なんて、とても叶はないさ』すると獅子は『だつて この石像は、お前さんの仲間の人間が慥へたのだもの、若し僕等、獅子が石像を立てる仕方を知つてるなら、言ふまでもない、獅子の前脚で抑へ付けられた人間の様を見ることが出来るさ』。

其二十六 柘榴と林檎と荊棘

柘榴と林檎とが、何方が一番美しいといつて争つて居た。互に言ひ張つて、口論最中になつた時、隣りの生垣から、荊蕀の花が、ひよいと顔を出して、さも自慢げな聲で言ふには『まー、貴嬢がた、少くとも妾の居る所では、そんな無益な口論はお已めなさいませな』

アンドロクルスと獅子

牧

羊

近頃動物虐待防止會といふ會の出來て居ることは皆さん既に御存じでせう。この會は、人間が、自分よりも下な弱い動物を苛めるのは、いけないなるべく大事にしてやらなければならぬといふのでつまり動物を可愛がつてやることを、世間一般の人に奨励るのであります。

動物だつて、つらい事も悲しい事も知つて居れば嬉しい事も楽しい事も知つて居ます。夫を無暗に苛めるのは、まことに彼等に取つて可愛相な仕業でありませんか、殊更、動物の中でも、恩に感じて其恩に報ゆることなどもよく知つて居るのが澤山あります。犬とか、馬とか、猫とか、牛とかの恩に感じたお話は、古からの本に澤山出て居ませう。して見ると動物だつて決して無闇に苛めてはなりません。

彼の獅子といふ獸は、皆さん御承知の通り、勇猛無類で、獸の王とまでいはれるのであります。其獅子に就いて、古くから傳はつてゐる面白いお話があります。

むかし、アフリカの北の岸の所に、カルセージといふ國がありました。其國に、アンドロクル